

宮本武蔵『五輪書』における「わざ」と「道」

笠 井 哲

序

私は本稿で、宮本武蔵玄信（一五八四—一六四五）が彼の到達した「兵法の道」を一書にまとめた『五輪書』を取り上げてみる。武蔵は、現代日本においてのみならず、国際的にも、最も著名な剣豪であるが、その生涯は明らかではない。『五輪書』の序文のみを、信頼できる伝記とする見方もあるが、後述するように『五輪書』の自筆本がないので、著者武蔵を疑問視する人さえもいる。

しかし、『五輪書』の思想が武蔵自身のものであることは異論はないので、この書の記述に即して彼の思想を考察したい。書名の「五輪」は、密教の用語から採ったと思われるが、この書に密教的なものはない。序文で、

今此書を作るといへども、仏法・儒道の古語をもららず、軍記・軍法の古きことをもちひず、（一一頁）

というように、彼独自の思想によって『五輪書』が書かれたのである。

さて、以下において私は、まず一では、『五輪書』の「地之巻」

を中心にして、武蔵の「兵法の道」とそれに至るための「修行」について検討する。次に二では、「水之巻」を中心に、「風之巻」、新陰柳生流伝書等をも参照しつつ、「わざ」と「心」について考察する。そして最後に、宮本武蔵研究において不可避の問題である『五輪書』の「著者」について論じてみたい。

一、兵法の道と修行

宮本武蔵が歩んだ「道」は、「兵法の道」というものである。『五輪書』の「地之巻」で、次のようにいわれている。

夫兵法といふ事、武家の法なり。将たるものは、とりわけ此法をおこなひ、卒たるものも、此道を知るべき事也。今世の中に、兵法の道髓にわきまへたるといふ武士なし。（一一—一二頁）

ここで「兵法の道」とは、「兵法の真髄」を意味する。武蔵によると、世の中には、仏法で人を救う道、儒教に文の道、医者に諸病を治す道がある。あるいは、歌人の和歌の道等、その他様々な芸能があり、人々はそれらを思い思いに稽古している。だが、兵法の道を好む人は稀である。兵法の「道」、つまり「領域」を好む人は稀に

しかないものであるが、武士は、「文武二道」といって、二つの「道」つまり「領域」を嗜む事が、「道」すなわち「任務」⁽¹⁾とされる。だから、

縦ひ此道ぶきようなりとも、武士たるものは、おのれくが分際程は、兵の法をばつとむべき事なり。大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。(一二頁)

という。しかし武士だけではなく、僧も女も百姓までも、義理を知り、恥を思い、死を覚悟することはある。武士が他の者と異なるのは、兵法を行う「道」において、如何なる場合でも「人に勝つ」ことを根本とすることである。なぜなら、武士にとって負けることは、死に直結しているからである。

さて武蔵は、大工は「大きにたくむ」と書くのであり、兵法の道は「大きなるたくみ」であるので、兵法の道を当時の「日本の最先端をゆく技術」である大工の道に喩えて、

一 兵法の道、大工にたとへたる事

大將は大工の統領として、天下のかねをわきまへ、其国のかねを糺し、其家のかねを知る事、統領の道也。(二七―八頁)という。このように、彼の兵法では、「天下のかね」、つまり天下を治める法までも問題にしている。さらに「家を立つるに木くばりをする事」が説かれるが、これは、用兵に際して適材を適所に配することを喩えたものと思われる。しかし、現実には部下を指揮して戦ったことがない武蔵は、材木でない人間を將の意図のままに動かすには、どうすればよいかということまでは触れていない。

將の心得に対して、士卒の心得も説かれている。武蔵は「士卒たるものは大工」であるとして、次のようにいう。

大工のたしなみ、よくきるゝ道具を持ち、透々にとぐ事肝要也。(二〇頁)

と、武器の手入れを喩えて、

大工のたしなみ、ひずまざる事、とめをあはする事、かんなに能くけづる事、すみがかざる事、後にひすかざる事、肝要なり。(二二頁)

と、徹底的に武芸の「わざ」を修練しておくべきであることを喩えている。そういう修練の果てに武蔵は如何なる境地を目指したのであろうか。この『五輪書』の第五の巻を「空之巻」とする理由を述べた箇所でこういう。

空と云出すよりしては、何をか奥といひ、何をか口といはん。

道理を得ては道理をはなれ、兵法の道に、おのれと自由ありて、おのれと奇特を得、時にあいてはひやうしを知り、おのづから打ち、おのづからあたる、是みな空の道也。(二五頁)

この武蔵の「空」について、鎌田茂雄氏は、

空といつても仏教の『般若心経』などで説く空とは異なり、どこまでも自在であり、執着がないことをいうのである。⁽³⁾

と述べている。「道理を得ては道理をはなれ」というのは、道理にとられないことである。そうして、自由自在の境地になりきった時、力や「わざ」を十分に発揮できるのである。したがって、武蔵における「空」は、柳生宗矩(一五七―一六四六)の『兵法家伝書』に説く「平常心」や沢庵宗彭(一五七三―一六四五)の「不動

智」と同様に、「無心」の境地を表していると考えられる。

さて、「兵法に武具の利を知るといふ事」においては、武器の効用が論じられた後に、

され共、座敷にての利をおぼへ、こまやかに思ひ、実の道を忘るゝにおゐては、出合ひがたかるべし。(三三頁)

という。ここで武蔵は、戦場武芸としての本来の意味を忘れて、末技にとらわれた屋内稽古を批判している。さらに、

当世におゐては、弓は申すに及ばず、諸芸花多くして実すくなし。さやうの芸能は、肝要の時、役に立ちがたし。(同前)

と、武芸の「華法化」⁽⁴⁾を批判する。同様の批判は、近世中期の儒者・古文辞学者として知られる荻生徂徠(一六六六—一七二八)の兵法書『鈴録』の第一巻にもみられる。

今時ノ鎗モ剣術モ、皆治世ノ人ノ工夫大ケレバ、大形ハ一人ヲ相手ニシテ、尋常ニ立向ヒ、アタリニ見物ヲ大勢置テ、見事ニ勝事ヲ第一ニス。殊ニ、世次第ニ向上ニナリ、武士モ暖ニナリタレバ、道理ノ高妙ヲ談ジ、或ハ立廻リ、所作ノ見事ナルヲ専トシ、——中略——皆高妙ノ至極ヲ極メタレドモ、戦場ノ用ニハ無益ノ事ナリ。⁽⁵⁾

と、上級武士の間で行われた「華法剣術」を実戦で役に立たないものであると批判する。江戸中期に盛んになった「華法剣術」は、江戸初期、少なくとも武蔵の晩年にその萌芽がみられたといふことができる。

以上考察してきた「地之巻」の終りには、

我兵法を学ばんと思ふ人は、道をおこなふ法あり。(三六頁)

として、九項目が挙げられている。そのうち、

第二に、道の鍛練する所

第三に、諸芸にさはる所

第四に、諸職の道を知る事(同前)

とある。二番目が重要なはいうまでもない。ここでは、特に三と四について考えてみたいと思う。

まず、三では、兵法のみならず、広く諸芸に触れるようにすべきであるといひ、四では自分の職能だけではなく、広く多くの職能の道を知るようにすべきであるというのである。先にみたように、武蔵は、大工の道について熟知していたのである。また周知のように、彼は芸術家でもあった。書画はもとより、木工・彫刻から、茶道・連歌等、広範囲にわたって、非凡な芸術を極めたとされている。ではなぜ彼は、そういうことをなしたのであろうか。吉川英治氏は、その理由を次のように述べている。

古人にとっては、余技もまた一つの人格構成の常識として、持たれていたにちがいない。現代人は、趣味を、自分の職業とする「道」から忘れるために——慰労のために趣味に遊ぼうとするが——古人のそれは、反対に、自分の天職の「道」を中心において、その中心を研ぐために——画筆も把り、書道にも心を入れ、能もやり、彫刻もし、茶室にも坐ってみる——という心がまえであったものと思われる。つまり、現代人の趣味目的は、放心的に。古人のは、求心的に。——そういう相違ではなかつたろうか。⁽⁶⁾

したがって武蔵は、

其道にあらざるといふとも、道を広くすれば、物毎に出であふ事也。(三一頁)

というのである。「地之巻」の結びでも、

いづれの道におめても、人にまけざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也。(三八頁)

と、如何なる道も「兵法の道」に通ずることが説かれている。

このような考え方は、武蔵独りのものではない。例えば、茶道においても、『山上宗二記』で、師匠と別れた場合の心得として、次のようにいわれている。

茶湯ノ師ニ別テ後、師ニ用ル覚悟ハ、一切ノ上、仏法、歌道并能、乱舞、刀ノ上、尤又、下々ノ所作マテモ、名人ノ仕事ヲ茶湯ト目明ノ手本ニスル也、

武蔵の場合、生涯特定の師を持ったことはないのであるが、意味するところは同じである。

では次に、「兵法の道」に至るための「修行」を考えてみたい。ただし、武蔵自身は、『五輪書』において、「修行」という言葉を用いずに、「稽古」あるいは「鍛練」といい表している。

まず、『五輪書』の冒頭において、

兵法の道、二天一流と号し、数年鍛練の事、初而書物に頼はさんと思ひ、(九頁)

と、この書に、自分自身の鍛練によって得られたものを書くことを宣言している。さらに次のように述べている。

我、三十を越へて跡をおもひみるに、兵法至極してかつにはあらず。——中略——其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕練して

みれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。(一

〇——一頁)

佐々木小次郎との決闘は、『三天記』によると、武蔵二九歳の時のこととされているが、三〇歳以後、彼が兵法者と立ち合ったということは、伝えられていない。「其後なをもふかき道理を得ん」というのは、佐々木小次郎との死闘によって、自己の不十分さを悟って、単なる剣の「術」から剣の「道」を旨指したということであろう。新陰柳生流の用語でいえば、「殺人刀」から「活人剣」への転回ということになる。その間武蔵は、諸国を流浪しながら、剣の深い道理を得るために、「朝鍛夕練」の修行に入つたと考えられる。「朝鍛夕練」とは、毎日不断に継続して行く修行のことである。「水之巻」の後書きで、

此一書の内を、一ケ条／＼と稽古して、敵とたゝかい、次第／＼に道の利を得て、(七四頁)

と、二天一流を学ぶには、この『五輪書』を師の教えとして稽古すべきであり、それを、

不_レ断心に懸け、いそぐ心なくして、折々手にふれては徳を覚え、いづれの人とも打合ひ、其心をしつて、千里の道もひと足宛はこぶなり。(七四頁)

といって、千里の道も一歩からであるとする。この「兵法の道」を修行することは、武士の役目と心得て、

けふはきのふの我にかち、あすは下手にかち、後は上手に勝つとおもひ、(七四—七五頁)

という。このことは、「兵法の道」ばかりではなく、芸道一般さら

にはあらゆる「道」に通ずるものであると思う。武威は「水之巻」を、

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。能々吟味有るべきもの也。(七五頁)

と結んで、不断に鍛練すべきことを強調する。

「火之巻」の序でも、

我兵法の直道、世界におゐて誰か得ん、又いづれかきわめんと慥に思ひとつて、朝鍛夕練して、みがきおほせて後、独り自由を得、おのづからきどくを得、通力不思議有る所、是兵として法をおこなふ息也。(七九頁)

といつて、この二天一流の兵法の正しい道を究めようと、朝に夕に鍛練を積んで、わざを磨き尽くして後に、自然に人並みはずれた力量を得て、自由自在の神妙な力を持てるようになることが、武士として兵法を修行する心意気であるとしている。

ところで、「風之巻」に他流の兵法を書き付ける理由は、次のようである。

他流の道をしらずしては、我一流の道慥にわきまへがたし。

(一一三頁)

そして、「他流に、太刀かず多き事」として、次のようにいわれている。

太刀のかず余多にして、人に伝ゆる事、道をうり物にしたてゝ、太刀数おほくしりたると、初心のものに深く思はせん為成るべし。兵法にきらふ心也。(一二二頁)

武威がこのようにいうのは、人を斬るのにいろいろな方法があると

考えるのが、そもそも誤っているからなのである。人を斬ることに、兵法を知る者も、知らない者も、女子供であっても違いはない。打つ、叩く、斬るということに多くのやり方があるわけではない。それ以外には、突く、薙ぐことがあるだけである。二天一流の兵法の道は、

先づきる所の道なれば、数の多かるべき子細にあらず。(一二二頁)

と、敵を斬ることを忘れないように戒める。それでは、正しい兵法の道によつて、人を斬るにはどうすればよいか。武威は、

我兵法におゐては、身なりも心も直にして、敵をひずませ、ゆがませて、敵の心のねちひねる所を勝つ事肝心也。(同前)

という。さらに、上述のように数多くの太刀を、「表」や「奥」に分けて教えているような流派に対して、批判がなされる。

一 他流に、奥表といふ事

兵法のことにおゐて、いづれを表といひ、何れを奥といはん。芸により、ことにふれて、極意・秘伝などといひて、奥口あれども、敵と打合ふ時の理におゐては、表にてたゞかい、奥をもつてきるといふ事にあらず。(一二三頁)

これはまた、当時形成されつつあった武芸師範達の「家元制度」に対する批判なのである。武威が「秘伝」を否定したのは、二天一流の教習課程を次のように考えたからなのである。初めて兵法を学ぶ人に対しては、その人が習い易いような「わざ」からまず習わせ、早く理解できるように教えるようにする。その人の境地が進むにしたがつて、次第に理解し難い道理をも教えるように心が

ける。ここには、世阿弥（一三六三—一四四三）の『風姿花伝』

「第一年来稽古条々」の教えに通ずる思想があると思われる。

なお、大抵は実際に打ち合う時の道理を通して理解させるようにするのだから、「奥口」つまり奥儀に通ずる入口等はないのである。二天一流の兵法の道においては、何を隠し、何を公にする等ということはない。

然るによつて、我道を伝ふるに、誓紙・罰文などといふ事を好まず、（一三三頁）

なぜなら、そういう起請文の類は、兵法を売り物にすることや「金許」の弊につながるからである。宮本武蔵の二天一流の兵法の道は、学ぶ人の智力を判断して、正しい道を教え、兵法を学ぶうちに身につく様々な欠点を除き、自然に「武士の法の実の道」すなわち武士の道の正しいあり方を悟らせて、ゆれ動かない心にするることなのである。

二、「わざ」と「心」

次に「水之巻」を中心に、「わざ」と「心」について考えてみたい。この巻では、精神と肉体の両面から、自己を如何に鍛えるかについて詳細に説かれている。続く「火之巻」が、主として敵との関係における種々の戦法を説いているのに対して、この「水之巻」は、いわば主体的な力を養う方法に主眼が置かれているということができる。

まず戦闘時の「姿勢」は、次のようである。

一 兵法の身なりの事

身のかゝり、顔はうつむかず、あをのかず、かたむかず、ひずまず、目をみださず、一中略—少しおとがいを出す心なり。くびはうしろのすじを直に、うなじに力をいれて、肩より惣身はひとしく覚へ、両のかたをさげ、脊すじをろくに、尻を出さず、ひざより足先まで力を入れて、腰のかゝまざるやうに腹をはり、くさびをしむるといひて、脇差のさやに腹をもたせて、帯のくつろがざるやうに、くさびをしむるといふおしへあり。

（四五—六頁）

ここでの記述から、二天一流の姿勢を具体的に思い浮かべてみると、他の武芸、例えば新陰柳生流の『兵法家伝書』に表されたものとは大きく異なっていることがわかる。『兵法家伝書』の「進履橋」に「五ヶの習」として、

- 一 身を一重になすべき事
- 一 敵の拳を我肩にくらぶべき事
- 一 我拳を楯につくべき事
- 一 左の脇を延ばすべき事
- 一 さきの膝に身をもたせ、あとの膝をのばすべき事（二〇頁）

と挙げられている姿勢や慶長六年（一六〇二）二月、柳生石舟斎宗敵（一五三九—一六〇六）が金春七郎氏勝に与えた『新陰流兵法目録事』という絵目録に描かれている姿勢が、半身で重心を低くして両足を大きく開き「前傾姿勢」を取っているのに対して、武蔵の場合はいわゆる「自然体」なのである。

これを武芸史の上からみれば、戦国時代の甲冑を身に着けた「介

者劍術」から「素肌劍術」という流れの中で捉えることができる。⁽¹³⁾つまり、宗敵、宗矩までの新陰柳生流兵法は、まだ「介者劍術」の名残りを留めているけれど、武蔵の二天一流兵法は、すでにすっかり「素肌劍術」になっていたのである。だから、

惣而兵法の身におゐて、常の身を兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする事肝要也。(四六頁)

と、戦いの場においても「つねの身」、いわば「平常身」を要請するのである。

次に武蔵は、戦闘時の目の配り方について、

一 兵法の目付といふ事

目の付けやうは、大きに広く付くる目也。観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専也。敵の太刀をしり、聊かも敵の太刀を見ずといふ事、兵法の大事也。工夫有るべし。(同前)

という。「観」も「見」も同じく「みること」であるが、「み方」が異なる。武蔵の門人の手による『二刀一流極意條々』においては、見ト云ハ目許ニテ見ル事也、観ト云ハ心ニテ観ル観智ノ事也、精神腹ニ治テ強ク成ル氣ヲ発シテ見ルモノ也⁽¹⁴⁾、

と、目もとでみる「見」に対して、「観」とは心でみることで、仏教の「観智」とされる。これは、二天一流のみならず、『兵法家伝書』の「活人剣」においても次のようにいわれる。

目に見るをば見と云ひ、心に見るを観と云ふ。(七六頁)

では、「精神腹ニ治テ強ク成ル氣ヲ発シテ見ル」とは、どういうことであろうか。柳生十兵衛三厳(一六〇七—一五〇)の『武蔵野』

において、

観は聞⁽¹⁵⁾心、目をふさぎみる心、うちにみるなり。観に所作はなき也。所作は相手次第いづるもの也。

といわれている。「観は心で聞く」というが、武芸で心は腹に、より正確には「臍下丹田」にあるとされる。この「丹田」から「氣」を発して、相手の「氣」の動きを聞くのである。だから相手を目で見る必要はなく、目をふさいでいても、心で相手の動きを感じとる。このように、「観」は相手の動作を見るのではなくて、相手の「氣」の動きを見るのである。相手の動作を見るのは「見」に外ならない。

さらに「遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事」が重要なのは、敵の動きの全体をつかむためである。目の前の動きに心がとらわれると、例えば相手の太刀が中段から上段に変わる時、その変化に心が奪われてしまうと、その外の動きが見えなくなる。したがって、「観の目つよく、見の目よはく」というのである。そして「敵の太刀をしり、聊かも敵の太刀を見ず」というのは、敵の太刀の動きを知ることが大切であるけれど、敵の太刀の動きに心がとらわれて、敵の動きの全体が見えなくなることがないように注意したのである。

次に「太刀の持ちやうの事」において、親指と人差指を浮かすような心持ちで持ち、中指は締めず、ゆるめず、薬指と小指を締める心持ちで持つのである。手の締め方にゆるみがあるのはよくないとし、武蔵は、

敵をきるものなりとおもひて、太刀をとるべし。(四七頁)

という。つまり、一でもみたように二天一流では、太刀は敵を斬るためにあるのであって、それ以外の何物でもないのである。だからもし敵の太刀を、叩いたり、受けたり、押さえたりする場合にも、親指と人差指の調子を少し変えるくらいに気持ちで、

とにも角にも、きるとおもひて、太刀をとるべし。(四八頁)

という。また試し斬りの場合は勿論、実戦においても、

人をきるといふ手の内に替る事なし。(同前)

と重ねて強調する。そして、

惣而、太刀にても、手にても、いつくとゆふ事をきらふ。いつくは、しぬる手也。いつかざるは、いきる手也。能々心得べきもの也。(同前)

という。沢庵や柳生宗矩は、心が一所に「いつく」、すなわち心が固着することを戒めているが、武蔵の場合は、単に心ではなく、太刀も手も一所に固定して動かないことは死に通ずるとして否定するのである。

また「五方の構」として、上段、中段、下段、右の脇、左の脇に構えることを挙げる。ここでも、

構五つにわかつといへども、皆人をきらん為也。構五つより外はなし。いづれのかまへなりとも、かまゆるとおもはず、きる事なりとおもふべし。(四九頁)

と、とにかく「斬る」ために構えるのだと、「形式」(構)と「目的」(斬ること)を、取り違えないようにと注意している。そこで、太刀は如何に振るべきかということが問題になる。

一 太刀の道といふ事

太刀の道を知るといふは、常に我さす刀をゆび二つにてふる時も、道すじ能くしりては自由ふるもの也。太刀をはやく振らんとするによつて、太刀の道さかいてふりがたし。太刀はふりよき程に静かにふる心也。(五〇—一頁)

このように、むやみに太刀を早く振ろうとすることを戒めている。では、どうすれば、太刀の通る道筋というものを習得することができるのであろうか。それについて武蔵は、

我兵法の五つのおもてをつかひ覚ゆれば、太刀の道定まりて、ふりよき所也。能々鍛練すべし。(五一頁)

と、「五つのおもて」すなわち「五つの基本型」を十分に鍛練し、使い覚えることだといひ、それを具体的に挙げてゐる。それによると、上、中、下、左の脇、右の脇の各々に太刀を置くのを「構」、それが敵に向かつて動くのが、「おもて」である。ところが、その後で武蔵は、一見矛盾するように思える、「構はありて構はなし」と説いている。

一 有構無構のおしへの事

有構無構といふは、太刀をかまゆるといふ事あるべき事にあらず。(五六頁)

しかし、太刀を上、中、下、左の脇、右の脇の五方に置くのは「構」ということができる。ではなぜ「有構無構」というのであろうか。

太刀は、敵の縁により、所により、けいきにしたがい、何れの方に置きたりとも、其敵きりよきやうに持つ心也。(同前)

例えば、上段の「構」も場合により少し下げれば、中段となり、中段を状況に応じてやや上げれば上段となり、下段も時によって少し

上げれば中段となるといった具合である。したがって、「構はありて構はなし」、すなわち状況の変化によって、「構」は融通自在にすべきなのである。このように「有構無構」というのは、あたかも禅的な境地のように聞こえるけれど、そうではなく、あくまでも実際の刀法そのものから、述べられたのである。だから重要なのは、次のことである。

先づ太刀をとつては、いづれにしてなりとも、敵をきるといふ心也。——中略——みな敵をきる縁なりと心得べし。——中略——何事もきる縁と思ふ事肝要也。(五六—七頁)

こうして、「構」にしろ「おもて」にしろ、敵を斬る「縁」、きっかけなのであって、それ自身が目的ではないことを注意している。武蔵は五つの「型」を説きながらも、その「型」に「いつく」、とらわれることを戒める。一定の「型」に従うことばかり考えると、型にはまって動きが鈍くなるからである。ここでも武蔵は、目的（斬ること）を忘れた形式主義を批判している。「風之巻」においても、

一 他に、太刀の構を用ゐる事

太刀のかまへを専にする所、ひがごとなり。世の中にかまへのあらん事は、敵のなき時の事なるべし。——中略——構といひ、後手の心を嫌ふ也。然る故に、我道に有構無構といひて、かまへはありてかまへはなきといふ所也。(一二三—四頁)

と、二天一流においては、常に「先手」を取るためにも、「構」は「後手」になる可能性があるので嫌うとする。

さて、「水之巻」の「敵を打つに、一拍子の打の事」(五七頁)

から「打つとあたるといふ事」(六二頁)まで、実際に太刀を持つて敵を打つ技法が九項目にわたり説かれている。それらは皆、思索や道場の稽古からではなく、実戦の中から得られたことを記していると思う。例えば「太刀にかはる身といふ事」で次のようにいう。

敵の打つ縁により、身をばさきへうつ身になり、太刀は身にかまはず打つ所也。(六二頁)

ここでは、捨て身になることが説かれている。太刀を構えて、恐怖心から腰が引けると、敵を斬ることができないばかりか、自分が斬り殺されてしまう。身を太刀よりも進めるつもりでやらなければ、人を斬ることはできない。そのためには、如何にすればよいのだろうか。まず、手を伸ばすよりも、身を出すことをいうのが、「しうこうの身といふ事」(六三頁)である。「しつかうの身といふ事」(六四頁)では、敵の身に自分の身を密着させることが説かれる。入身の際、身を縮めるのでなく、かえって丈高になって、強く入り込むべきことをいうのが「たけくらべといふ事」(六四—五頁)である。「ねばりをかくるといふ事」(六五頁)では、敵の太刀に離れずに太刀をつけて攻めたてたことをいう。体当り、当て身について説くのが、「身のあたりといふ事」(六五—六頁)である。また、①敵に入り込む時、②突き受け、③短い太刀で入る時の「三つのうけの事」では、消極的なものでなく、

左の手をにぎりて、こぶしにてつらをつくやうに思ふべし。(六七頁)

と、積極的で能動的な「受け」を挙げている。

以上のような具体的な技法を述べたものに対して、「水之巻」の

最後の三項目は観念的に説かれている。

一 打あいの利の事

此うちあいの利といふ事に、兵法、太刀にての勝利をわきまゆる所也。(七二頁)

一 一つの打といふ事

此一つの打といふ心をもつて、慥に勝つ所を得る事也。以下下略——(七三頁)

一 直通のくらいといふ事

直通の心、二刀一流の実の道をうけて、伝ゆる所也。以下略——(同前)

この三つは、あるいは口伝であり、あるいは十分に稽古、鍛練すべきであるとされるが、如何なる内容であるかは述べられない。もはや「わざ」ではなく、「心」の問題なのであらう。そこで「心」について考えてみよう。

一 兵法心持の事

兵法の道におゐて、心の持ちやうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時に、少しもかはらずして、心を広く直にして、きつくひつばらず、少しもたるまず、心のかたよらぬやうに、心をまん中におきて、心を静かにゆるがせて、其ゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。(四二—三頁)

このように、戦闘時においても「常の心」、すなわち「平常心」であるようにせよというのである。さらに、

静かなる時も心は静かならず、何とはやき時も心は少しもはや

からず、心は身につれず、身は心につれず、心に用心して、身には用心をせず、心のたらしめ事なくして、心を少しもあまらせず、(四三頁)

というのは、戦闘に臨む心を「平常心」として、その心の状態を四六時中持続しなければならぬからである。

武蔵の生きた戦国時代から江戸時代初期において、戦争は処々で繰り返され、殺伐の気風が巷に充満していた。そういう時代の兵法は、人を斬るためのものであったから、兵法家は寸時も治にいて乱を忘れることはなかった。武蔵自身、身も心も臨戦態勢であることが「常」であったから、体が静止していようと、心を静止させてはいけなかったのである。如何なる事態になろうとも、すぐに即応できる心、それが武蔵の「常の心」である。

三、『五輪書』の著者——結びにかえて——

これまで私は、『五輪書』を宮本武蔵著として扱ってきた。けれども周知のように、本当に武蔵がこの書を書いたのかどうかは、宮本武蔵論の争点の一つである。そこで最後に、この問題に対する所見を述べて結びとしたい。

西山松之助氏は、武蔵が「兵法の変貌時代を生き抜いた果てに、その晩年の正保二年（一六四五）」に、『五輪書』を書いたというのは、「すこぶるあやしい」として、次のように述べている。

それは武蔵の自筆本が伝わっていないこと、柳生宗矩の『兵法家伝書』と比べて、『五輪書』の実技の記録が冴えていないこと、武蔵の身体の生理的条件、わけても、兵法観の時代による

落差などからすれば、彼が最晩年に、このような書を書いたということは、まことに疑わしい。おそらく主君細川忠利の命によって、武蔵がみずから整理記録した『兵法三十五箇条』をもとにして、武蔵の没後、その高弟寺尾孫之丞が、師武蔵の教えを整理敷衍して、万治から寛文初年ごろまでに書きあげたものではないかと思われる。

この西山説が、武蔵を著者とし、側の代表的な見解である。これに対して、例えば、寺田透氏は、次のように述べている。

僕には五輪書は、何だかひどく哲学的な書物のやうに思へる。そればかりかこの本に書かれてゐるのは、著者自身の考へであり、何かにかはる、どこかで行はれてゐた既成觀念だとは思はれない。

どんな心酔する師匠にもせよ、自分でないひとの考へを教へられて書きとどめた本が、かういう飾りも誇張もない、強い迫力を持つ文ばかりで出来るだらうかと、疑はれる。

この寺田説が、『五輪書』を宮本武蔵が書いたものとする人達の意見を代表している。

まず西山説に關していうなら、『五輪書』の実技の記録が、『兵法家伝書』に比べて冴えていないというが、必ずしもそうではない。これまで述べたところからも明らかのように、二天一流の特色は、極度に「華法」を嫌い、実戦的・実用的であることを第一とし、他流にみられるような多くの「構」や「型」を重視しなかったことである。『五輪書』には、そういう武蔵の考へが、「荒削りのまま提示されている良さ」があると思う。

また、「兵法観の時代による落差云々」というが、これも『兵法家伝書』と比較してのことであろう。『兵法家伝書』は寛永九年（一六三二）成立であり、『五輪書』は正保二年（一六四五）成立で、僅かながら『兵法家伝書』の成立の方が早いのである。それにもかかわらず、『兵法家伝書』の方が新しい時代の到来を感じさせるのに対して、『五輪書』の兵法観は前時代的と感じさせることを、西山氏は疑問視しているようである。寺田氏は、この理由について、以下のように説明している。

しかしこれらの兵法書の書かれた場所、書き手の身分、立場の相違を考慮する必要がある。九州肥後の岩戸山中で、大藩だとは言え、外様の一藩の藩主（細川忠利）にすぎぬものに自己一流の「兵法」についての考へを知ってもらおうとして、しかも述べそこなった劍客の書いた乃至語ったもの（『五輪書』）と、江戸で將軍家兵法師範から総目付に転任陞進した身分のものが書いたもの（『兵法家伝書』）とは、まして後者に「柳生宗厳・宗矩」父子重代の推蔵や、能役者（金春七郎氏勝）や禅僧（沢庵宗彭）との親交などの条件が加われば、後者が新時代的な趣きを帯びるのは自然の数だろう。

この見解は、まさにその通りであると思う。だが、先に西山説と對比して挙げておいた寺田説は、武蔵の自筆本が発見されない限り、首肯しかねる。そこで私は、一つの仮定ではあるが、武蔵研究家の丸岡宗男氏と今村嘉雄氏の次のような説を、現時点では採用しようと思う。

『五輪書』は、武蔵が常日ごろ寺尾等高弟に物語った（口伝し

た)数々の極意を、高弟たちが書きとめておき、「兵法三十五箇条」を柱としてまとめた、「武蔵兵法聞書」ともいうべきもので、没前に武蔵の校閲を乞うたと仮定してみる。武蔵一見して、誤りのないことを認め、巻末に「空有善無惡、智は有也、利は有也、道は有也、心は空也」の五行を加えて、署名したと考えられないであろうか。とりわけ、この最後の五行がひととき筆太に書かれていて、武蔵自書のそれを、そのままに模したようにもとれるからである。この最後の推理は「宮本武蔵の出自」の筆者丸岡宗男によるものだが、一考に価する。⁽²⁰⁾

『五輪書』の精神的な側面は、他の芸道ばかりか、万事に通ずるようであり、欧米でも翻訳(英・独)が読まれている。そういう普遍性を持つなら、この書の思想は武蔵以外の人のものと考ええることもできる。しかしこの書が持つもう一つの側面、つまり実技の書という面からみると、やはり実際に自分で体験した人の口から出た言葉でなければならぬと思う。要するに、『五輪書』の「著者」は、宮本武蔵であるといえよう。

註

『五輪書』、『兵法家伝書』ともに、渡辺一郎校注の岩波文庫版(昭和六〇年)により、本文中に頁数を記す。

(1) 『五輪書』における「道」の多義性は、寺田透『道の思想』(創文社、昭和五三年)で指摘されている。

(2) 谷沢永一『五輪書の読み方』(ごま書房、昭和五七年)、五三頁。

(3) 鎌田茂雄『五輪書』(講談社学術文庫、昭和六一年)、六九頁。

(4) 実際には役に立たず、ただ一種の飾りのような剣術は、「華法剣術」といわれ、批判された。

(5) 『荻生徂徠全集第6巻』(河出書房新社、昭和五三年)、三九九頁。

(6) 詳しくは、拙論「荻生徂徠の武芸観」、『武道学研究』第二巻第二号(日本武道学会、昭和六三年)所収、を参照されたい。

(7) 『吉川英治全集18』(講談社、昭和五五年)、二六三頁。

(8) 千宗室他編『茶道古典全集第六巻』(淡交社、昭和三一年)、九四頁。

(9) 今村嘉雄他編『日本武道大系第二巻』(同朋舎出版、昭和五七年)、二二—三頁。

(10) 『日本思想大系24 世阿弥 禅竹』(岩波書店、昭和四九年)、一五—一〇頁。ただし武蔵は、世阿弥のように特に年齢に応じた教習課程を説いてはいない。

(11) 金銭による免許。武芸等の技量、人格が不十分であるにもかかわらず、金銭で免許を与えること。江戸時代の秘事伝授には、他に義理その外様々な事情で技量未熟でも授けた「義理許」、真正正銘の腕前による「術許」、以上の三通りが行われていたという。

(12) 彼は、禅竹以来七代目の金春大夫を継ぎ、慶長一五年(一六一〇)三五歳で早世した。青年時代は能よりもむしろ武芸

を好んだという。

- (13) このような「姿勢」の変遷の基準となったのは、介者剣術↓素肌剣術↓竹刀剣術という戦闘及び稽古様式の変化である。この戦闘(稽古)様式の変化ということは、具体的に、甲冑↓素肌↓防具、また真剣↓木刀↓竹刀という、そこに用いられる道具の変化であるといえる。甲冑↓素肌↓防具という変化によって狙い所(打突部位)が決定され、真剣↓木刀↓竹刀という変化によって、切る技術から打つ技術へと変化したのである。

田中守「近世剣術伝書にみる『構え』の考察」、『日本武道学研究 渡辺一郎教授退官記念論集』(島津書房、昭和六三年)所収を参照。

- (14) 宮本武蔵『剣道秘要全』(体育とスポーツ出版社、昭和五六年復刻)、一三一頁。

- (15) 今村嘉雄編『史料柳生新陰流下巻』(人物往来社、昭和四二年)、一一一頁。

- (16) 『西山松之助著作集第六巻 芸道と伝統』(吉川弘文館、昭和五九年)、一五八頁。

- (17) 寺田透『覚書き日本の思想』(岩波書店、昭和五八年)、二七六頁。

- (18) 渡辺一郎「解説」、『五輪書』(岩波文庫)所収、一七二頁。

- (19) 寺田前掲註(1)、九七頁。「」は筆者による。

- (20) 註(9)、五一―二頁。

(筑波大学大学院院生)